

例会報告：2017年2月7日（晴れ）

第1967回 通常例会

（続き）
 専門分野において想定外はなく、全て想定しなくてはならないのです。では運はどうやってどういう手段でやって来るのか？ある日突然天から降ってくるものではなく、必ず人が持ってくるものです。偶然ではなく、明確な意思と目的のもとに誰かが分けてくれるものです。
 貸したりプレゼントしたり与えてもらうものです。例えば豊臣秀吉は人生のポイントごとに信長の運をもらって出世しました。
 人間として大切な3つの条件を持っていたからです。「人間の本能で好きか」「信頼できるか」「尊敬できるか」です。根本的願望が存在するわけです。明日を「明るい日」と書くのは人間の願望です。人が人を好きになるのは明るさです。どんな状況においても明るさを顕示できることが必要です。
 震災などで瓦礫の下に生き埋めになった人の生存限界時間は72時間・3日間と言われます。実際3日で人は死にまっせん。では何故でしょうか？心が肉体を滅ぼすのです。絶望は脳を黒く塗りつぶし、恐怖や不安で生命力を削ります。その中で2種類の方々は助かる可能性があります。まず、赤ちゃんや子供、考える能力のない人。そして、どんな状況でも脳の中に光りと明かりを自家発電できる人です。超人的なものではなく、確信力のなせる業なのです。後天性の病気や事故・トラブル・アクシデント、人生の成功失敗は、その人の心が95%を決していると確信しています。

❖ ニコニコ箱

一寸木 芳行委員長

	ニコニコ箱	累計	目標
2月7日分	7,300	511,235	1,200,000

＊Welcomeメッセージ

杉崎 勝成さん…小西様、本日卓話たのしみにしています。
 辻村 彰秀さん…小西さん、本日はわざわざありがとうございます。よろしくお願いたします。
 上田 博和さん…小西様、今日はわざわざ小田原までありがとうございました。
 ＊その他
 西 寛様…休みがちですみません。
 一寸木 芳行さん…休みが多くてすみません。

■ 今後のメークアップ情報 ■

-2017年2月-

- ▶15日（水）小田原北
- ▶16日（木）小田原中 特別休会
- ▶17日（金）湯河原 ニューウェルシティ湯河原 12:30
「会員による卓話」
- ▶17日（金）足柄 おんりーゆー 12:30
「卓話 担当：会場監督」
- ▶20日（月）小田原 報徳会館 12:30
「クラブフォーラム⑨（国際奉仕委員会）」
- ▶21日（火）箱根 宮ノ下富士屋ホテル 12:30
- ▶22日（水）小田原北
- ▶23日（木）小田原中 報徳会館 12:30
「クラブフォーラム⑩新会員セミナー報告」
- ▶24日（金）湯河原 ニューウェルシティ湯河原 12:30
「出前講座③」
- ▶24日（金）足柄 おんりーゆー 12:30
「卓話 担当：職業奉仕」
- ▶27日（月）小田原 報徳会館 12:30
「卓話 担当：プログラム委員会」
- ▶28日（火）箱根 宮ノ下富士屋ホテル 12:30
「卓話 新世代奉仕委員会」

-2017年3月-

- ▶1日（水）小田原北
- ▶2日（木）小田原中 報徳会館 12:30
- ▶3日（金）湯河原 ニューウェルシティ湯河原 12:30
「会員による卓話」
- ▶3日（金）足柄 おんりーゆー 12:30
「卓話 担当：プログラム」
- ▶6日（月）小田原 報徳会館 12:30
「クラブフォーラム⑪広報委員会」

【小田原城北ロータリー・クラブ】
 事務局：〒250-0211 小田原市鬼柳172-9
 電話：0465-37-1222 FAX：0465-37-7377
 URL：http://www.odawarajhrc.jp
 Mail：info@odawarajhrc.jp
 例会場：小田原卸センター内会議室
 創立：1976年4月2日 承認：1976年5月8日
 例会：毎週火曜日 12:30～13:30
 クラブ会報委員会
 監修：櫻井 康二
 編集長：小林 和彦
 コピーライター：小林 和彦
 デザイン：小林 和彦
 フィールド：大川 久弥

会員数：36名



RAC
会員募集中

相応しい会員をご紹介ください！



国際ロータリー第2780地区

小田原城北ロータリー・クラブ

R.I. DISTRICT No.2780
 ODAWARA JOHOKU R.C.
 2016-2017
 WEEKLY BULLETIN



【R.I. 会長】
 ジョン・ジャーム
 【R.I. 2780地区ガバナー】
 佐野 英之
 【第9グループガバナー補佐】
 高田 喜好



【会長】辻村 彰秀
 【副会長】阿久津 馨
 【幹事】櫻井 康二
 【副幹事】荻野 善明
 【会場監督】小川 和夫

人類に奉仕するロータリー

ROTARY SERVING HUMANITY

本日の例会：通常例会（第1968回）

会場：小田原卸センター内会議室
 日時：2017年2月14日 12:30～13:30
 司会：荻野 善明 副幹事

12:30	開会点鐘：辻村 彰秀 会長 ロータリーソング斉唱 「我等の生業」 スピーカーおよびビジターの紹介 慶事祝福 会長挨拶 幹事報告／出席報告／委員会報告 同好会報告／ニコニコ箱 閉会点鐘：辻村 彰秀 会長
13:00	臨時総会

【今後の例会・卓話スケジュール】

- 2月21日（火）クラブフォーラム（国際奉仕）
本多委員長
- 2月28日（火）クラブフォーラム（社会奉仕）
須藤委員長
- 3月7日（火）通常例会 12:30
卓話：山内 英嗣様
「遠隔医療を基軸とした街作り構想」
- 3月14日（火）夜間例会（お花見例会）
- 3月21日（火）通常例会 12:30
卓話：弁護士 宇田様
「犯罪被害者支援活動について」
- 3月28日（火）通常例会 12:30
クラブ協議会（PETS報告）

■寄稿（11）

“坂”という字のついた地名は、日本全国に非常に多くあります。また坂という字のついた本もかなりあります。例えば司馬遼太郎の“坂の上の雲”とか、山本周五郎の“ながい坂”などは有名です。歌にもさだまさしの“無縁坂”など、いまでも歌われているものもあります。“坂”という字は、人間の運命とか人生を考える時に良く使われる文字です。
 1人の人間についてみても、歩きつづけてきた“坂”はとても長いものがあります。しかしその坂もいつかは終わります。いつまでもいつまでも登り続けるわけにはいきません。人生誰でもいつかはピークを迎えます。大切なことはその先をどう生きるかです。人生は60歳くらいまでには、たいてい勝負がついてきます。
 人によっては、坂の勾配も長さもちがいます。坂のくだり方も様々ですが、高いところに登るほど、くだり方は難しくなります。

「功なり名を遂げたのに、くだり際を誤り、晩節を汚した経営者が多い。」と、佐高 信さんは言っています。坂の向こうに一体何があるのか。必死にのぼっているときには見えません。
 「坂を下りたらひとりきりになる。上っているときに、その時への備え、心構えができていかどうかが大切である。」坂をおりた時に自分の一生が見えるのかも知れない。坂のくだり方について、「出来るだけ微笑みをたやさず、ユーモアを解し、世間から忘れられてゆくことを意に介しない心境を目指したいものである。」と思っています。ですから60歳を過ぎたら、今までのぼってきた坂をゆっくりと楽しみながら、くだればよいのでは。ロータリー活動を通じて、そのような心境になれるように思っています。

大谷 宏

会場：小田原卸センター内会議室
日時：2017年2月7日 12：30～13：45

◆ 会長挨拶



辻村 彰秀 会長

皆さん、こんにちは！ 寒くなったり、暖くなったり安定しない気候ですので、皆さんには体調管理に十分ご注意願いたいと思っております。天候が異常なのか、松田山の早咲き桜も、既にほぼ満開になってしまいました。さくら祭りは2月11日からですが、是非、花見で松田町にお越しになる方は、早めにお越しください。

皆様もご存知のように、2か月後の4月16日、日曜日に松田町の立花学園にて2780地区の地区研修・協議会が小田原北口タリークラブのホストのもと開催されます。この地区協のために当クラブより10名のお手伝いの登録、要請がありました。今月の20日には顔合わせ、打ち合わせの拡大実行委員会が開催されます。個別に皆さんにお願いいたしますので、快くご協力下さるよう、宜しくをお願いいたします。是非、この地区協が成功するように全面的に協力したいと思っております。

次週は、臨時クラブ総会となり、クラブ細則、会長エレクト、次年度理事の承認を行いたいと思っております。楽しい、先進的なクラブになるためにも必要なクラブ細則改正と思っております。又、この新しいクラブ細則のもと、増強にも邁進していきたいと思っております。是非ご出席いただき、有益な総会になるよう皆様のご協力をお願いいたします。

本日の卓話は、世界14ある8000m峰のうち6座を無酸素で登頂なさった、登山家の小西浩文さんです。とても有名な方で、数多くのテレビ、ラジオ等のメディアに出演され、又、その数多くの経験からいろいろな場所で講演なされていらっしゃる。プログラム委員長の上田会員が無理を言って卓話をお願いし、わざわざ来ていただきました。是非皆さん、短い時間で申し訳ございませんが、小西さんの素敵な講演を十分にお楽しみください。

以上、本日のご挨拶でした。ありがとうございました。

◆ 幹事報告



櫻井 康二 幹事

- 1)お花見例会の出欠を2月21日までに提出して下さい。
- 2)ロータリー手帳の要・不要を提出して下さい。

◆ 出席報告

木村 啓滋 委員

出席報告	会員数	出席	M.U	出席率
2月7日	36(34)	28	0	82.35%
1月31日	36(33)	24	1	75.76%
1月24日	36(33)	26	0	78.79%

【欠席者】：6名
守屋 善男、齋藤 永、大木 清、大野 英明、長田 英一、大高 英之
【今回MU】なし
【前回MU】増加なし
【前々回MU】増加なし

◆ 卓話

「生き残る技術」

登山家・小西 浩文 様



私がやってきた8,000m峰無酸素登頂ですが、ヒマラヤ山脈には8,000m峰がネパール、インド、中国領チベット、パキスタンの4カ国に14峰あります。そこに何とか酸素ボンベ無しで全部登れないかと挑戦してきました。この会場で8,000mと言っても想像しにくいでしょう。最初にスライドを見て私が何をやってきたか聞いていただいて、「運」に対しての考え方のお話をさせていただきます。

まずこちらが世界最高峰エベレスト、中国名チョモランマ、標高8,848mです。画像はその隣の8,500mのローツェという山で、私がいる場所は4,000mくらい。富士山の頂上から+200mの場所で、ここを岩壁登攀しています。このような8,000m峰が世界に14峰あり、99%の登山家は海に潜る時のような酸素ボンベを背負って頂上を目指します。私はこういった酸素ボンベを一切使わない「無酸素登山」にこの30年挑んでいます。8,000mがどのような環境かという、例えば飛行機で海外へ行く時に巡航高度は通常7,500mから11,000mくらい。そこに私は二本の足で歩いて登っている訳です。自分の心臓と肺を武器に、国際線が飛ぶ雲の上まで登っています。学者は「デスゾーン（死の地帯）」と定義します。この地球上のいかなる生き物も一切生存を許されない場所です。そこに1982年から2011年までの約30年間に20数回突入してきました。私が登山を始めたのは15歳で、翌年には冬の北アルプスで岸壁や氷壁を登るようになりました。その頃から完全に山に夢中で、早く8,000m峰に行きたいと考えていました。世界の屋根と呼ばれる山々に、皆が酸素ボンベを背負って登るなら、自分はボンベの助けなしに登りたい。人類の限界線上の行為に挑戦したかったのです。20歳の時にチベットの8,000m峰登山隊に入れていただいて、無事無酸素登頂に成功しました。

最年少登頂記録にもなり幸先のいいスタートを切ることができました。ただ、私が考えていた8,000m峰と実際は全く違うものでした。日本の山で培った友情や仲間意識といった美辞麗句が木っ端微塵に粉碎される人間関係の修羅場が、デスゾーンにはありました。仲間のことなど構ってられない、自分の命を守るのが精一杯なのです。それが極限状況での人間の現実の姿でした。弱冠20歳だった私は人間の本質に触れて愕然とし、一時8,000m峰から離れました。その間、ヨガの修業をして呼吸法・集中力を学び、また6,000m、7,000mの危険で困難な岸壁や氷壁に登っていました。そして20代後半になりあの頃より人間的に成長したかなと、また8,000m無酸素に戻ろうと決めた矢先、喉に癌が見つかります。甲状腺がんでした。すぐ入院して放射線療法を受け、首の手術に臨みました。でも退院して半年後に、首のリンパに転移していることが分かりました。再入院して今度はリンパを切除したのです。さすがに2回も手術してこれで癌と縁が切れたかと思ったら、3年後に再転移が見つかります。上部頸椎の下に転移して、ステージ4だと、長生きできないと言われました。転移を繰り返して手術を重ね、若いのに癌で死ぬのかと考えましたが、病院のベッドでこのまま死ぬくらいなら8,000m峰を登ってやろうと思ったのです。入院・手術・退院の合間を縫って8,000m峰に4回挑戦し、そのうち2座の無酸素登頂に成功しました。人類発生以来、現役バリバリの癌患者で8,000mを無酸素で登ったのは私一人です！当時は山に行けばそこで死ぬ確率の方が圧倒的に高かったのですが、病院で死ぬことが耐え切れず、半ばやけくそで行っていました。何故できたのか？ 屈強な肉体を持っていたからではありません。病人だったのですから。その経験が後年、人間の心の可能性を感じる部分に繋がります。私の想いが私の肉体を引きずって行ったのです。人間の可能性は非常に強力だと確信しました。自分が思っているより人間は大変な能力を持っている、その可能性に気づくか気づかないかは、人生が開くかどうかの分かれ目だと思います。8,000mという場所は日本と比べて空気の量が30%、気圧が1/3、気温は-10℃から-50℃、常時風速10mから40m、冬はジェット気流が降りてくるので時速100kmから300kmの風が吹いています。そのような環境で酸素ボンベなしで頂上を目指すのですが、何が一番問題かという極端に薄い空気と極端に低い気圧です。人間の一番大切な脳がやられて正常な判断が出来なくなり、ルート上で遭難してしまう、単純なミスで転落してしまう、これが一番の死因です。二番目は雪が起こす雪崩です。ヒマラヤ登山の事故の4割は雪崩です。準備には何十日もかけて何千mの固定ロープを張って物資を荷揚げして、標高5,000mにベースキャンプを設営します。3,000mくらいから頂上まで2か月



以上かけて進み、頂上近くでは日本を代表する登山家でも10歩進んだら休まないと呼吸が戻らないような状況です。凍傷で指を切断したり鼻を失くしてしまってもまだ登り続ける、もう「山気狂い」としか言いようがありません。人間はやる気になればそれくらい出来るということです。自分の足で危険と困難を突破して安全地帯まで下りてくる、これが8,000m無酸素登山です。21年前、1996年秋に世界最高峰エベレストの無酸素登頂にトライしました。日本人では1983年に5人のトップクライマーが成功していますが、下りで2人が命を落としました。この年は私も8,000m峰を4つ無酸素で登っていたので、やれると思ってトライしました。いきなり崩れることもあるクレバスはアルミの梯子で渡りますが、そういうロシアンルーレットのような運任せの場所が何十箇所とあるのです。この時は私たち4人で最終キャンプに向かう途中で雪崩が直撃して、私以外の3人が亡くなり登頂を断念します。17年前、俳優の西田敏行さんをガイドして南米大陸最高峰アコンカグア6,960mにTV番組で行きました。私一人ではサポートできないので、若手トップクライマー6人に手伝ってもらいました。最終段階で西田さんには大量の酸素を吸ってもらいましたが、残念ながら頂上の100m下で時間切れにて断念となりました。この時にサポートしてくれた6人のうち、1人は10ヶ月後に行方不明となり、1人はチベットで遭難し、もう1人は12月の富士山でテントごと転落して亡くなりました。6人中3人が亡くなっているわけです。そして2002年、再婚したばかりの妻がクモ膜下出血を起こし亡くなってしまいます。今までにザイルパートナーの59人が亡くなっていますが、一般人である妻が死んだのは堪えました。エベレスト麓の古いお寺に籠って滝行をし、残念ながら若くして亡くなった人たちの想いを背負っていく覚悟を決めたのでした。日本には不安を抱えている方が多いことに気づき、私が山からもらった勇気や元氣をお伝えしたいと感じました。山に登りながら色々なお話をしたり、講演会をさせていただいて今日に至っています。40歳を超えてから山登りの中で2つのことを目標に定めました。1つは仏教でいう宿命「四苦八苦」、生老病死・愛別離苦、これを「デスゾーン」という生き地獄の経験で乗り越えることが出来ないか？ もう1つは運です。私は自分の努力で運の限界を延ばせるか実験してみたい。この2つの想いを持って登山してきました。山の経験で確信したのは「どんな出来事にも予兆前兆がある」ということ。凍傷になるのは、体力を使い果たして余裕がなくなった時です。ベテランでもそうなるのは、実は何年も前からいつ危険になってもおかしくない状況だったからです。心が「過信」に陥っていたからなのです。スポーツならば失敗したら解雇される、チームをクビになる、で済みます。しかし山ではミスが許されません。実力を過信していると孫子の兵法という「彼我の力を見誤った」ということになります。山のスケール・困難性・危険性・天候・コンディションと自分の実力・コンディションの判断を誤った結果として凍傷になった。完全なミスステイクです。世の中の事故の99%はミスステイクで、福島原発が3.11の時に発言した「想定外だった」はプロの台詞ではありません。（裏面へ続く）